

CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

「治る認知症」

特発性正常圧水頭症診療の課題

脳機能画像診断開発部 病態画像研究室

文堂 昌彦 室長

平成 22 年 10 月 14 日(木) 午後 16 時 00 分～

東棟 2 階 会議室

特発性正常圧水頭症 (idiopathic normal pressure hydrocephalus、iNPH) は、くも膜下出血などの先行疾患なしに、脳脊髄液貯留による脳室拡大を来すことによって、歩行障害と認知機能障害、尿失禁を来す高齢者に特有の症候群である。手術によって症状の改善が期待され、「治療可能な認知症」として注目されている。iNPH は予てから比較的頻度の少ない疾患と認識されてきたが、最近、65 歳以上高齢者の 1.1%を占めるという研究報告が成された。この数値通りであれば iNPH はアルツハイマー病やレビー小体病に劣らず重要な症候群と考えられる。

しかし、この数値は「臨床症状と画像診断で iNPH の特徴を備えているもの(=possible iNPH)」の割合であり、possible iNPH は手術効果が確認されて初めて definite iNPH と診断される。possible iNPH の大多数が definite iNPH であるという主張があり、possible iNPH の割合を検討することには意義があるが、possible iNPH の診断を困難にする要因に、パーキンソン病、レビー小体病、進行性核上性麻痺、アルツハイマー病など神経変性疾患群の存在があり、これら変性疾患との鑑別診断が明確でなければ、iNPH の病態や有病率は霧の中である。

我々が ^{18}F -DOPA PET と ^{123}I -MIBG 心筋シンチを用いて、possible iNPH における黒質線条体機能機能と心臓交感神経終末機能を調査した結果、possible iNPH には神経変性疾患の可能性のある症例が相当数含まれていることが分かった。また、definite iNPH にも神経変性疾患との co-morbidity が稀ではないことも判明した。このような核医学的診断方法は、iNPH と変性疾患の整理を行う上で極めて有用であった。また、臨床症状や MRI のみによる iNPH 診断の困難さが改めて実感された。

今後は、 ^{18}F -DOPA PET のみならず ^{11}C -PiB PET を用いて、アルツハイマー病の可能性も加えた possible iNPH のサブクラス分類を行い、それぞれの症状や神経画像を精密に評価することによって、iNPH と神経変性疾患の関連性を更に明らかにしていきたいと考えている。このような手法によって、iNPH の有病率や病態を包んでいる霧が少し晴れることを期待している。